

県道円座香南線建設に伴う埋蔵文化財調査（古田3号塚）^{こでんさんごうづか}（予備調査）

県道円座香南線は高松自動車道高松西インターチェンジと高松空港を結ぶ路線として計画され、既に北から順次工事が行われ部分的ではあるが供用が開始されている。残る香南工区約1.2kmの工事計画が持ち上がり路線内の埋蔵文化財包蔵状況を確認する必要があるため、令和元年4月1日から6月30日の期間で、予備調査を実施した。路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地は存在しなかったため、近接した古田3号塚の名称を使用している。

調査は基本的に宅地・農地等の1区画につき幅2mのトレンチを2本以上設定し、遺構面・旧地表面までは小型の重機で掘り下げ、その後は作業員による掘り下げ、壁面清掃などを行う形で行った。

なお、水田耕作により上記期間に調査が実施できなかった部分のうち2か所については、同年11月にトレンチ調査を実施した。

調査の結果、7トレンチ南半から11トレンチにかけてで中世から近世にかけての柱穴群、溝群、21トレンチで時期不明の大溝、26トレンチで中世の土師器杯が出土した溝、33トレンチで古代の須恵器片が出土した土坑などを確認した。

当該地一帯は昭和時代の農業基盤整備事業により大規模な土地の切り盛りが行われており、旧地形の微高地部分は耕作土直下に削平を受けた地山層が露出するような状態で、旧地表面は失われている箇所が多かった。路線内に存在した小開析谷部分は比較的旧地形をとどめていたが、遺構・遺物はほとんど確認することができなかった。

以上の結果から、7トレンチ南半から11トレンチの範囲2,380㎡については「池内古田遺跡」^{いけのうちこでん}、21・26トレンチ部分の1,020㎡については「池内御所原遺跡」^{いけのうちごしょばら}、33トレンチ部分の1,287㎡については「上道池東遺跡」^{かみみちいけがし}として、それぞれ事業に先立つ事前の保護措置が必要であると判断した。

なお、「上道池東遺跡」の隣接地には民家が集中している部分があり、移転・撤去後に同様の確認調査を実施する必要がある。（宮崎）



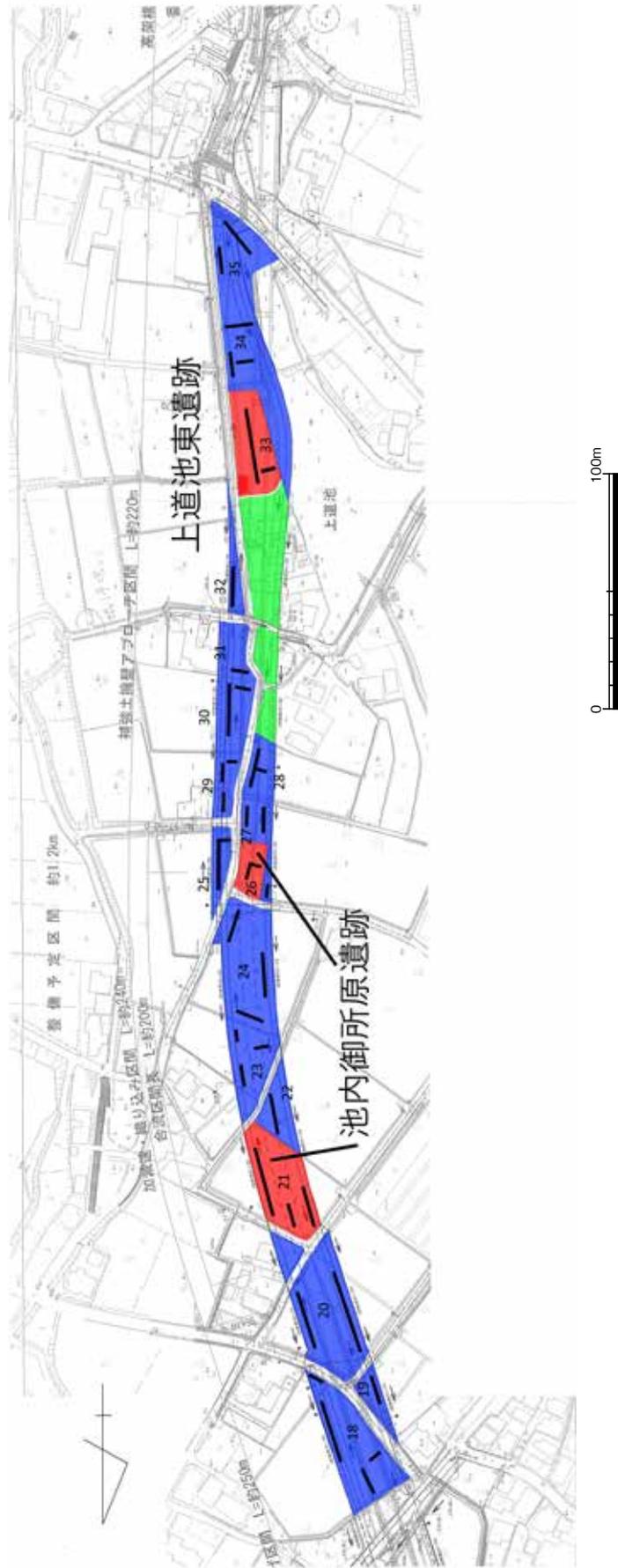
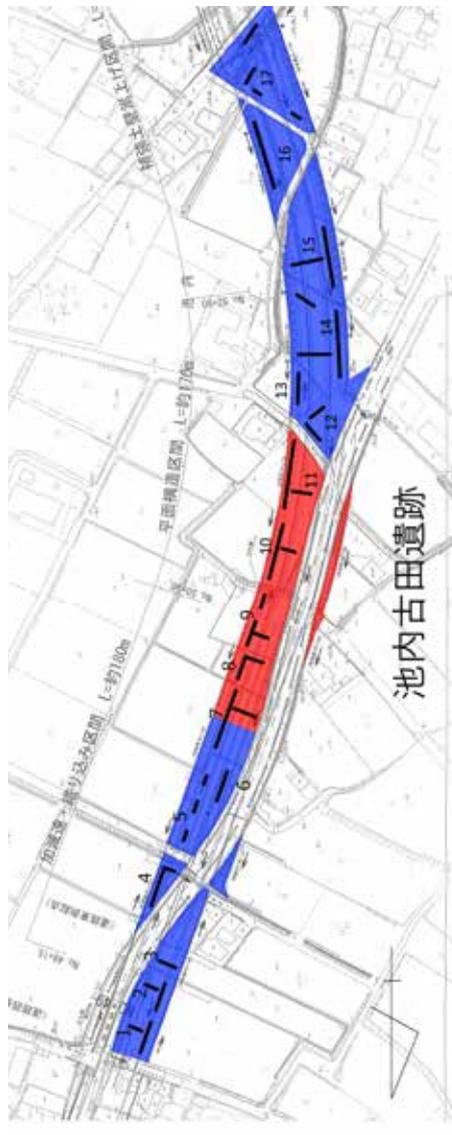
第9図 遺跡位置図（1/25,000）



写真17 5トレンチ作業風景（南から）



写真18 6トレンチ作業風景（南から）



凡例

- 保護措置必要範囲……………赤
- 保護措置不要範囲……………青
- 今後調査が必要な範囲……………緑
- 黒線はトレンチを示す

第10図 遺構配置図



写真 19 9 トレンチ溝検出状況 (北から)



写真 20 11 トレンチ柱穴群検出状況 (南から)



写真 21 11 トレンチ完掘全景 (北から)



写真 22 21 トレンチ完掘全景 (南から)



写真 23 21 トレンチ大溝検出状況 (西から)



写真 24 26 トレンチ完掘状況 (南から)



写真 25 26 トレンチ溝土器出土状況 (南から)



写真 26 33 トレンチ土坑検出状況 (南から)

いけのうちこでん
池内古田遺跡

池内古田遺跡は、高松市香南町池内に位置する。県道円座香南線建設に伴い、令和元年10月1日から令和2年1月31日に発掘調査を行った。調査面積は2,380㎡である。

調査地は高松平野の南端部の洪積台地上に立地し、南から北へ傾斜する。周辺は昭和時代に大規模なほ場整備を行っており、細かい土地の起伏は失われている。調査区は北から1～5区を設定した。

調査の結果、3～5区では耕作土・旧耕土などの下部で黄色粘土である基盤層、1・2区では、東部と西端付近では耕作土等の下部に黄色粘土である基盤層を検出した。

1・2区の中央付近は暗褐色粘質土を主体とした包含層の堆積が認められ、低湿地であったと考えられる。1～5区にかけては中世の溝群を、3区南半～5区にかけては江戸時代以降のピット群、井戸、溝などを検出した。

中世の溝群は1区～5区で検出した。4～5区では削平のため溝の遺存状態は悪かったが、3区～1区では4条の溝が近接・重複し、屈曲しながら北流し、1・2区では、東側の微高地と包含層が堆積する低地の境付近を北流する。これらの溝から13世紀代の土師質土器足釜、杯が出土し、この時期を中心に機能していたと考えられる。溝がほぼ同位置で重複して検出されたことから、長期間、水路の機能が維持されたことが窺える。また、これらの溝に先行して、3区南東端から2区北西端へ向けて横断し、1区の西端、西側の微高地と低地の境付近を北流する溝を検出した。12世紀代の須恵器甕、こね鉢、土師質土器足釜等が集中して出土し、この時期の溝と考えられる。

3区南半～5区にかけてはピット群、井戸などを検出した。ピット群は、13世紀代の溝を掘り込み、近世の陶磁器が出土する。井戸の最底部からは18世紀代の陶器碗や播鉢などが出土しており、18世紀代の集落と考えられる。

今回の発掘調査からは古代以前の遺構・遺物などは見つからず、この時期には開発は及んでいなかったと考えられる。12世紀代以降に溝群が掘削を繰り返しながら維持されたことから、この頃から生産活動が始まり、江戸時代以降には集落が営まれるようになったと考えられる。(山元)



第11図 遺跡位置図 (1/25,000)



写真27 1区完掘状況 (北西から)



写真28 1区溝群 (北から)



写真 29 3区全景 (南から)



写真 30 3区溝群 (北から)



写真 31 4区全景 (北から)



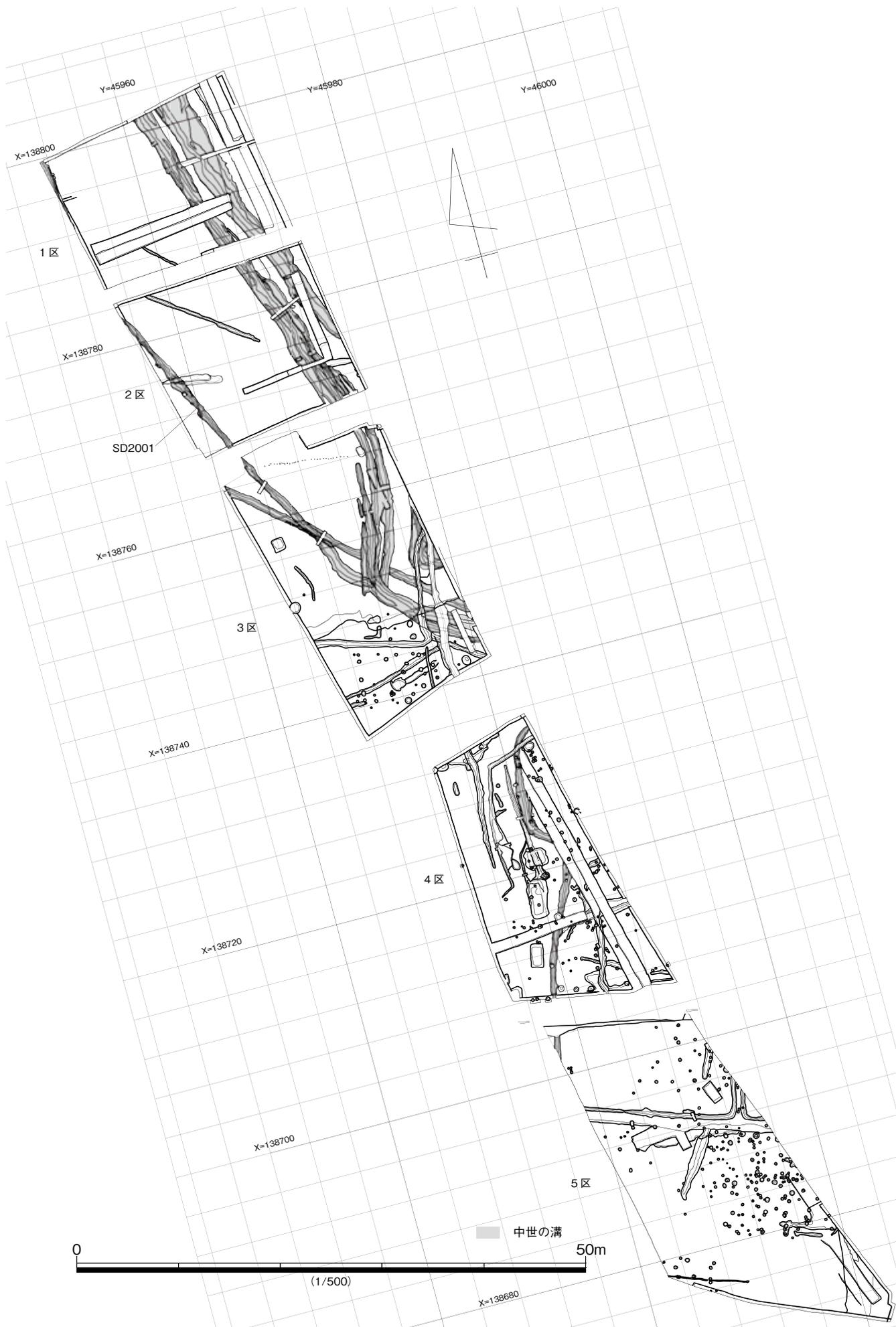
写真 32 5区全景 (北から)



写真 33 2区 SD2001 (西から)



写真 34 2区 SD2001 (北から)



第12図 遺構配置図

いけのうちごしょぼら
池内御所原遺跡

池内御所原遺跡は、高松市香南町池内に位置し、県道円座香南線建設に伴い、令和2年2月1日から3月31日の期間で発掘調査を実施した。調査対象地は約160m離れた2地点で、調査面積は合わせて1,020㎡を測る。

遺跡の周辺に周知の埋蔵文化財包蔵地は少なく、やや離れた場所に中世の塚や石造物、散布地が存在する程度である。

遺跡は高松平野の南端に接する洪積台地上に位置している。台地上は小河川の開析などで微起伏が認められるが、昭和時代の農業基盤整備に伴う土地造成により北へ傾斜する緩やかな階段状の田畑が広がっている。



第13図 遺跡位置図 (1/25,000)

調査の結果、それぞれの調査区で溝を中心とした遺構を確認した。耕作土直下で上面が水平な基盤層(黄褐色粘土)がみられるほど後世の削平を受けており、遺構が掘られた当時の地面は失われている。

北の調査区(1区)の遺構で特筆すべきは、検出幅約1.6m、深さ約1.2mを測るほぼ同規模の2条の溝である。試掘時には弧を描く1条の溝と推定したが、時期の異なる2条の溝であることが判明した。先行する溝SD127は断面形状が逆三角形を呈し、最深部は人間が片足で立つのがやっとなままでに狭い。やや蛇行しながら南西-北東方向を有する。後出する溝SD102は断面が逆台形を呈し、緩やかに弧を描きながら南西-東方向を有する。南西約3分の1は先行するSD127と一致しており、一部を掘り直して使用しているようである。どちらの溝も遺物の出土量が極めて少ないため詳細な時期の比定は困難だが、土師質土器小片の存在から中世以降と推定しておく。

南の調査区(2区)は小溝や土坑を検出したが、後世の削平を受けて溝は南半を消失している。出土遺物量は僅少で、中央の溝底部から中世の土師器杯3点がみられる程度であった。

今回の調査対象地は、溝を中心とした遺構や出土遺物の少なさなどから、中世以降の生産域(水田・畑など)である可能性が高い。近辺に居住域が存在することが想定されるため、今後の開発行為に対しては適切な対応が必要と思われる。また、両調査区に部分的に残存した包含層からは弥生時代のものとみられる打製石鏃が数点出土しており、遺跡周辺に同時代の遺跡が存在する可能性がある。(宮崎)



写真 35 1区完掘状況（北東から）



写真 36 1区 SD127(左)と SD102(右) (南西から)



写真 37 2区完掘状況（南から）



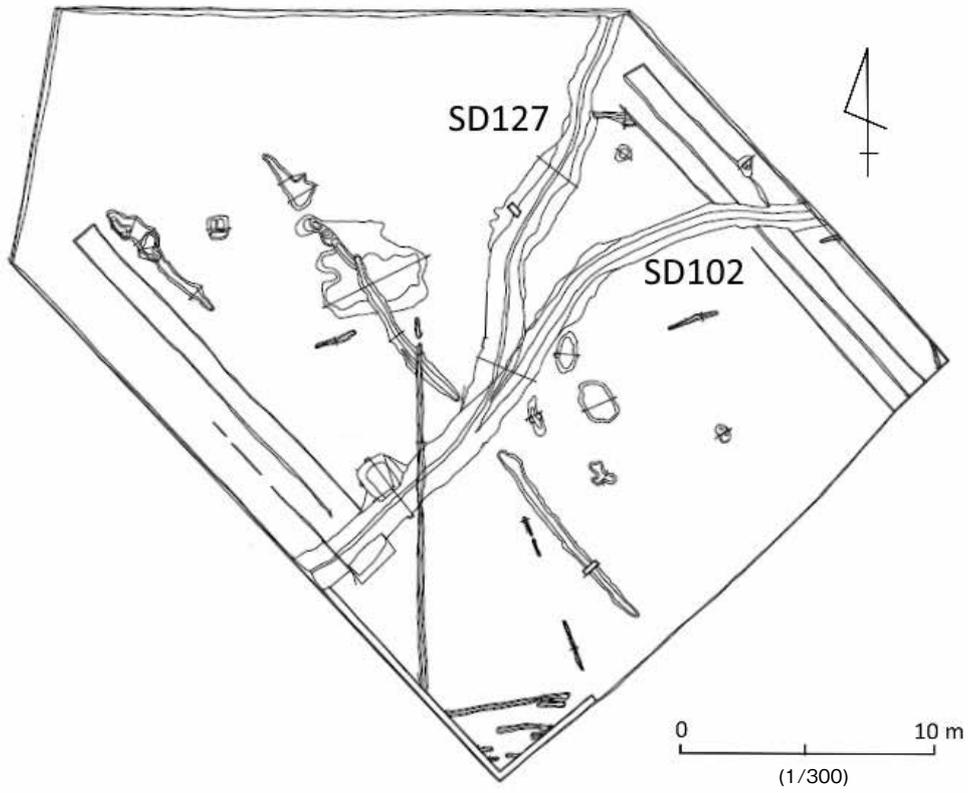
写真 38 2区溝内の遺物出土状況（南西から）



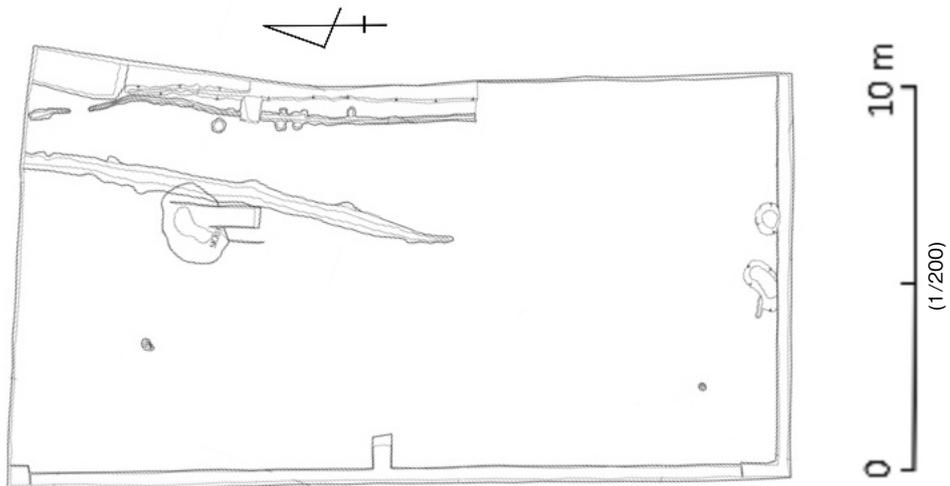
写真 39 2区の主な遺構（北から）



写真 40 1区作業風景（南西から）



第 14 图 1 区遺構配置図



第 15 图 2 区遺構配置図